

日本語概要

Acupuncture treatment dates back centuries

はりきゅう治療は何世紀も前から遡る

伊勢神宮は、日本の神社でも格別な存在だ。2000年以上前から皇族の祖先にあたる女神（天照大神）がまつられ、神道の無数の「神々」の頂点にあるとされる。

そこから 450 キロ離れた東京都墨田区の静かな通りの一角に、伊勢神宮ほどは知られていないが、変わった神がまつられた神社が佇んでいる。この江島杉山神社は、鍼神とされる杉山和一ゆかりの神社なのだ。神道では、自然界の神、例えば川や山を祭った神社が多く存在するが、日本全国で 8 万以上数える神社のうち、鍼の神はここだけだ。

略 （杉山和一の管鍼法エピソード説明）

管鍼法が発明されたことで、晴眼者も障害者もともに安定した刺鍼が可能になった。杉山の発明は現在も世界各国の臨床の場で受け入れられ、刺鍼痛が抑えられることから患者にも歓迎されている。杉山は日本鍼灸の父を言われ、江戸時代には視覚障害者の学校も建立した。

現在、約 9 万人いる有資格者の登録者数のうち、約 19%が視覚障害者である。もちろん、晴眼者とまったく同じ資格であり、権利・法律ともに同じ下、治療をしている。

日本で教育を受けた臨床家が、手先の感覚をより大事にしているという説も、このような歴史的背景があるといわれている。触覚だけでなく、臨床家は臭いや息遣いの音など、様々な感覚を用いて治療にあたるのだ。前述の伊勢神宮は、20 年ごとに象徴的な「生まれ変わり」を果たしてきた。これは神道の核となる考え方であるが、自らを刷新して、持続させていくという基本の形は日本のありとあらゆる場面で見ることができる。職業においても、たとえば大工だったり、鋳物の職人であったり、様々な「子弟制度」の中、技を磨いていくシステムが構築されているのだ。Hari-kyu の世界でも例外ではなく、現代にこの伝統医療を開花されるために若き臨床家がベテラン勢から技を受け継いでいる。

東京都内にある専門学校では、30 名ほどの学生が昼間の授業を終えた後も、自主的に残って実技練習に励んでいた。白衣に身を包んだ様々な学年の学生たちは、半米粒大の艾をひねり、時間を図っていたり、お互いへの刺鍼練習をおこなっていた。教員はその様子に目を配り、刺鍼の姿勢や距離についても細かくアドバイスをしていた。

このような日本の教育機関では、国家試験に備えて 361 の基本的な経穴を暗記するが、実際には東洋医学だけでなく、解剖学、生理学、公衆衛生学、臨床各論、リハビリといった西洋医学もマスターしなければ試験には受からない。現在、専門学校や大学で学んでいる生徒数は 4000 名ほどだが、そのうちの 300 名は視覚障害者である。さらに、その教育カリキュラムも見直しがされており、21 世紀の医療に貢献できるよう

に常に討議がおこなわれている。数か月ごとに厚生労働省でカリキュラムについての討論も開催されているところだ。

どのような分野の医学でも、プロになった者は教科書だけでは学べない、実践を積み重ねて価値ある技術を身に着けていくものだ。学生たちは深淵なる Hari-kyu のアートに触れ、理解し、トレーニングを積む。この学校で学ぶ若き臨床家達は、何世紀もの時間を経て確立した Hari-kyu のアートと、数え切れないほどの素晴らしい治療方法をどんどん吸収していくのだろう。

BY SIMONE CHEN